

電子書籍時代の土木学会の姿

関西大学名誉教授 フェロー ○三上 市藏
群馬工業高等専門学校 正会員 三上 卓

1. まえがき

昨年は電子書籍元年と言われ、多くの変化が進んだ。注目されるべきは多くの電子書籍リーダーが発売されたことである。そして、これに呼応して、多くの出版社・新聞社が電子書籍の出版に踏み出したし、電子書籍に特化した新規の出版社も出現した。新聞も雑誌も電子版が登場した。また、書店も電子書店に衣替えし出した。書店を介さずに、読者にインターネットで電子書籍を配布する形態も進んできた。一方、電子教科書も出現し、電子黒板と一体的に普及し出した。多くの学会が、学会誌・論文集の電子版化を図るだけでなく、速報性を目的に電子版を発行している。もちろん、課題もある。入手できる電子出版物がどの電子書籍リーダーで読めるかというともう一步である。出版の世界を構成してきた作家・出版社・流通業社・書店がどういう形で落ち着くのかも不明である。しかし、従来、絶版として放置されてきた知的物の復刊に電子出版は役立つだろうし、オンデマンド出版の機能は絶版物の復刊と少量出版、好きなときに出版物を入手することに有効であろう。したがって、土木学会、特に出版委員会・図書館は変わるべきである。目下考えられる姿を提案したい。

2. 土木学会の出版物

土木学会定款によると、土木学会の目的は、土木工学の進歩及び土木事業の発達並びに土木技術者の資質の向上を図り、もって学術文化の進展と社会の発展に寄与することである。そして、この目的を実現するための事業として、「土木工学に関する図書、印刷物の刊行」、「土木工学に関する研究発表会、講演会、講習会等の開催」、「土木工学に関する学術、技術の評価」、「土木に関する啓発及び広報活動」、「土木関係資料の収集・保管・公開」が挙げられている。

これを受けて、土木学会誌・土木学会論文集・土木学会委員会論文集・全国大会年次講演集・支部論文集、さらに出版規程に基づく一般刊行物が出版されている。だから、これらの出版は、土木に関する知識を広く一般に広め、土木工学および土木技術の進展に寄与することを目的としているといえる。

しかし、欠けている視点がある。まず、出版物の内容の水準・正確性などに拘るあまり「迅速性」が考えられていない。もう一つは、土木技術の特徴である「長寿命性」が配慮されていない。技術者個人の寿命を超える構造物を作っておきながら、後世の技術者が計画・設計・製作・仮設・建設、さらには保全の過程の記録を容易に検索・入手できない状況を放置している。これらは出版物を電子化することで、かなりが解決される。

定款では「土木に関する啓発及び広報活動」と書かれているように、土木学会の出版は、学会員のためだけではダメであり、社会の人々のためでもなければならない。これは、土木事業に対する期待・要望が消滅しているに近い現状では特に留意されるべきことである。しかし、土木学会のWebsiteは専ら土木学会員向けといえるものになっているし、刊行物の一覧を見ても、啓蒙に該当するものがあるだろうか。土木学会の電子出版を進めるに当たって、これらの課題も解決しなければならない。

3. 土木学会での電子出版

(1) 土木学会出版物の電子化

上記の出版物はかなり電子化されている。その努力は評価されるべきであるが、電子出版を中心に据えた運用という観点からは不満が残る。これまでの経過を顧みると、印刷物の発行の効率化、経費削減のために、電子データの提出を求めることに始まり、集まった電子データをCDあるいはDVDに収納して配布する。さらに、データベース化して、検索と入手の便宜を図る。

キーワード 電子書籍, 電子出版, 土木学会, 土木図書館, 出版委員会

連絡先 〒564-0083 大阪府吹田市朝日が丘町1-1-5 三上市藏 E-mail: gfh00126@nifty.com

しかし、情報の迅速な広報という観点では電子版の学会誌・論文集があつていい。電子書籍の配布にはたしてCD/DVDが必要であろうか。

(2) 発表したい学会員と知りたい学会員

学会員は、各自の技術に関して調査・研究成果を公表し、評価を受けたい学会員と、土木技術の現状・詳細を知りたい学会員とに分けられる。

現在までの土木学会の出版は専ら前者の会員のために計画され、運営されてきたように見える。また、前者の会員にとっても、迅速でなくても成果が正確に評価され、長く記録・伝聞されたい場合には現状でもいいであろうが、早期に広報したい場合にはほとんど機能していないのではないか。

こうした観点からは、速報性に重点を置いた電子出版(いわば電子版)を遂行すべきである。

新潮社は、海外在住の日本人向けに電子版「週刊新潮」を配信すると発表した。誌面イメージを生かし、すべての記事と写真を毎週金曜日に配信する。パソコン版とiPhone版、iPad版がある。土木学会でも海外向けの学会誌・論文集の配布に使える方法だろう。

(3) 絶版と復刊

これまで、土木学会の委員会が努力して技術・知識を集約して出版してきた図書は多いが、その殆どが数年もすると絶版になっている。出版物は要求が衰退して行くし、書庫のスペースも保管の経費も好ましくないから、どうしても廃棄に走る。また、土木技術は進化するからその時々には、過去の報告書はそれほど必要とされないのであろう。しかし、土木事業が社会基盤の整備と長期に渡る維持を目的としているのであるから、年月が経過してから必要となる技術の記録がある。これを絶版のままに放置するのは、土木技術の啓蒙にはならない。

ここでは、オンデマンド出版が有効である。もちろん、遡及の電子化は費用がかかるから、まずは現在から電子化を実現し、配布はオンデマンド出版に基づくものにする。印刷物にせずに、電子書籍によるオンライン配布も考慮するのがよい。そして、計画的に、時間はかかるが、遡及電子化の努力をすべきである。それは、貴重な土木技術の蓄積である。

(4) 種々の工夫

日本の出版物は書籍と雑誌で流通システムが違う。最近よく見掛ける物に「ムック(mook)」がある。これはMagazineの“M”と、Bookの“ook”を合成して作った造語で、内容は書籍のように1つのテーマでまとめているが、流通システムは雑誌扱いで、書籍に比べて短期間で販売を目指している。また、小型でページ数の少ない書物の意味では、小冊子(booklet)がある。こうした形態も考えてみるべきだろう。

4. 電子書籍リーダー

電子書籍向きのリーダーは、電子書籍を読むための読書専用型と他の機能も付いたタブレット型とに分けられる。アップルの「iPad」はタブレット型。ソニーの「Reader」、KDDIの「ビブリオリーブ」はモノクロ電子ペーパーを使った読書専用型。米アマゾンの「Kindle」も電子ペーパーだが、日本語サービスはまだ。シャープの「GALAPAGOS」はカラー液晶の読書専用型。他に、NTTドコモの読書専用型の「ブックリーダー」、タブレット型の「GALAXY Tab」がある。しかし、すべて電子規格が統一されていない点が悩ましい。

5. あとがき

電子書籍リーダーの電子規格が不統一であることや、電子書籍の配布体制が流動的であることなど、動き出すのは困難が多い。しかし、大方針を間違いなく設定して、検討しながら歩み始めるべきであろう。配布についてはベンチャー企業が動き出しているからそれを使うこともいいのではないか。土木学会の経費節減のみならず、会員サービスの多様性、社会への啓蒙の効果など、得られるところは大きい。ただし、旧来の仕組み、しがらみ、慣用などを壊すところから始めなければならない。

参考文献

1) 三上市蔵・三上卓:電子書籍時代の到来と土木学会の方向,土木情報利用技術講演会,Vol.35, pp.13-16, 2010.